

未知を発見 息子のロマン

「お父さん、もしどこでも好きなところに行けるなら、どこを選ぶ?」。毎朝、小学生の息子と出かける。歩きながらの問いかけが、いつもおもしろい。

こもってばかりではないものを作れない。旅は人を成長させてくれる。13歳で行ったネパールでは高山病にかかったものの、何とか山に登り、早朝にマチャプチャレ山を眺めた。神の山だと確信できる美しさだった。ホームステイ先の方々に、たいへんお世話になった。

20歳で行ったアメリカは3日



目に荷物をすべて盗まれ、現地でのパスポートの再発行が最初のイベントとなった。だが、出会った方々に助けられ、3カ月かけてアメリカ横断をすることができた。若くて貧しくてつらい旅ほど後で嬉しい。

5年前にオランダのお客様に誘われ、アムステルダムで受注イベントを開催。せっかくの機会だから、と駆けて足でヨーロッパをぐるり11カ国回った。

ストライキで高速鉄道TGVが運行しないことが多く、悩まされたが、憧れだったウィーンフィルとベルリンフィルを予定



万年筆職人

山本 竜さん (47) ④

通り聴くことができた。コンサートマスターのチューニングサウンドだけで全身がしびれて涙があふれた。普段仕事をちっとも休まないからと、行かせてくれた家族に感謝した。

さあ、息子にどう答えるか。思いついた答えが面白いだろう。

シベリア鉄道でウラジオストクからサンクトペテルブルクまで約1万キロ。バレエとエルミタージュ美術館が楽しみだ。また、南極大陸最高峰ビンソン・マシフに登るのはどうか。船の道中、クジラに出合えるかもしれない。

いや、違う。アマゾンだ。息子が好きな本に開高健の「オーパー」があるではないか。ピラルクーなどの怪魚を釣ろうじゃないか。

これだ。これが100点の答えだ。息子はお父さんと夢を共に

有できたと思いき喜ぶ。そうなるに違いない。

自信満々に鼻息を荒くして答えた。「そうだな。お父さんはアマゾンに……」

と、途中まで言ったところで、息子は自分の額をばちんとたたき、こう言った。

「ロマンが無いな。お父さんは、そんなのはお金と時間があれば行けるでしょ? 宇宙船に乗って誰も知らない星に降り立ってみたいとか、潜水艦に乗って深海の未発見の生物と遭遇するとか。わからないかな」

あきれながら学校へと向かっていた。自分が五感で感じた事がない事を感じるのが旅の醍醐味。しかしそれ以上に、未知を発見できるなら、とびっきりのロマンがある。息子に大切なことを教えてもらった。ものづくりに生かしたい。

やまもと・りょう 1974年生まれ。2008年から鳥取市にある有限会社万年筆博士の代表取締役。顧客の書き癖に合わせたカスタムメイド万年筆を製作している。納品まで約1年かかるが、世界中から愛好家の注文が集まる。